

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.13

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージさせる言葉です。

CONTENTS

- ◆特集1 収蔵品展と資料収集 P.2・3
- ◆特集2 酒蔵 —近代新潟の酒造り— P.4
- 常設展示室から 一部リニューアルしました P.5
- おすすめの一冊 「街の記憶 劇場のあかり—新潟県 映画館と観客の歴史—」 P.5
- みなとびあ研究notes 「石山村の学区会」 P.6
- 館長日記 北限の大型円墳 P.7
- 収蔵資料紹介 直江兼統と沼垂湊—上杉景勝朱印状写—(「沼垂町役所文書」) P.7
- みなとびあの人・人 企画普及課 樋口綾子 P.8



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.13

■帆檣成林「はんしょうせいりん」第13号 ■発行日 平成20年5月20日
■編集発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■印刷/株式会社ジョーメイ

新潟市歴史博物館の催し物

2008年5月～2008年8月

企画展	企画展関連イベント・講座	体験プログラム	
5月	4/19～6/8 酒蔵 近代新潟の酒造り—	17日 関連ワークショップ 18日 関連講演会 25日 博物館講座・展示解説会	18日 みなとびあで自然を感じてみよう
	6月	1日 関連講演会 展示解説会 8日 特別歴史講演会 展示解説会	8日 みなとびあで自然を感じてみよう
6/9～16 全館燻蒸期間			
7月	7/19～9/7 ムラの学校・マチの学校	22日 博物館講座 (兼 天地人リレー講演会)	21日 草花あそび 29日 親子で染色たいけん
		27日 博物館講座	6日 布をおってみよう 20日 みなとびあで自然を感じてみよう 26日・27日 あかりをつくってみよう
8月		17日 みなとびあで自然を感じてみよう	

※詳細につきましては、当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

平成20年度 企画展

「酒蔵 —近代新潟の酒造り—」

現在の新潟市域を中心に、近代の酒造りの様子や、消費地との関係について紹介します。

■会期 平成20年4月19日(土)～6月8日(日)

	一般	団体
大人	600円	480円
大学生・高校生	400円	320円
中学生・小学生	200円	160円

※土日祝日は小中学生は無料です。

■開館時間

9:30～18:00
(観覧券の販売は、閉館30分前まで)

■休館日

5月19日(月)・26日(月)・6月2日(月)

展示解説会

■日時

毎週日曜日14:30～(30分程度)
※企画展観覧券が必要です

次回企画展

平成20年度企画展「ムラの学校・マチの学校」

■会期 平成20年7月19日(土)～9月7日(日)

	一般	団体
大人	600円	480円
大学生・高校生	400円	320円
中学生・小学生	200円	160円

※土日祝日は小中学生は無料です。

■開館時間

9:30～18:00
(観覧券の販売は、閉館30分前まで)

■休館日

月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)、
祝日の翌日

◆申し込み・詳細につきましては当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

○お問い合わせ先

新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10 TEL025-225-6111 FAX025-225-6130 URL: http://www.nchm.jp e-mail:museum@nchm.jp

みなとびあの人・人

No.13 企画普及課 樋口綾子

より快適に安全にお客さまに博物館を楽しんでもらうため、博物館の仕事には職員以外に多くの人がかかわっています。定期的に博物館に来て、機械のメンテナンスをしたり、庭園の手入れをしたりする人もいます。そうした人々との連絡調整をし、スムーズに博物館が運営できるようにすることも企画普及課の仕事のひとつです。



また、昨年は博物館をお客さまからも支援・協力してもらうことを目的に、みなとびあファンクラブができました。企画普及課では学芸課と協力し、会員向けに博物館の近況や行いする予定をお知らせするファンクラブ通信を発行したり、会員向けの行事を企画しています。興味のある方は博物館までお問い合わせください。



2008年度 博物館講座

毎月第4日曜日、当館学芸員が講師となり、調査や研究を進めている内容を報告します。

【会場】博物館本館2階セミナー室*
【資料代】100円
【定員】50人

■5月の講座

【テーマ】「『日本書紀』から考える新潟の古代」
(土田学芸員)

【日時】5月25日(日) 13:30～15:00

■6月の講座

【テーマ】「直江兼統の蒲原支配—上杉景勝の越後統一戦略と新潟・沼垂湊—」
(長谷川学芸員)

【日時】6月22日(日) 13:30～15:00

※6月の博物館講座は、天地人リレー講演会と兼ね、「クロスバレルにいたる」で開催します。
(天地人リレー講演会については、新潟県立歴史博物館講座係) 0258-47-61135にお問い合わせください。

■7月の講座

【テーマ】「蒲原平野の酒蔵」(監野学芸員)

【日時】7月27日(日) 13:30～15:00

2008年度 特別歴史講演会

「古代エジプト王朝の外交と辺境支配」

【日時】6月8日(日) 13:30～16:00

【講師】屋形禎亮氏(元信州大学教授)

【会場】博物館本館2階セミナー室

【資料代】500円

【申込み】往復ハガキ・FAX・電子メールにて、「氏名、住所、電話番号」を明記のうえ当館まで。締切:5月30日(金) (必着)

【定員】80人(応募多数の場合、抽選)

編集後記

ゴールデンウィークは、ボランティアさんが大活躍でした。ボランティアさんたちは、5月3日には博物館クイズラリー、4日・5日には、ふだん見学できない旧新潟税関の塔屋ツアー、6日には下町つづじ祭りで出張むかしのあそび体験と、連日主催の活動を行いました。みなとびあでは元気なボランティアさんにも会うことができます。ぜひお出でください。(土田)



収蔵品展と資料収集

森 行人

博物館における資料収集

博物館にとって、資料の収集は最も根本的な活動です。博物館の活動として、資料収集・保存・調査研究・展示・教育普及の四つがあげられますが、資料がなくては調査研究や展示、教育普及はできません。

博物館の資料収集というと、古文書や美術品のように、人目をひく珍しい品や、歴史的・文化的な価値の定まった優品を集めるというイメージがあると思います。しかし、当館のような地域の歴史博物館では、博物館資料としての価値を、調査研究を通じて発見でき、展示や教育普及を通じて表現できるモノを収集することが基本になります。例えば、使うことがなくなった古い生活道具などをいただく、「これも資料になるの?」と驚かれることがあります。こうしたありふれた日常生活用具も、複数の資料と比較することによって、日常生活の歴史をたどる貴重な博物館資料となります。

資料収集の方法には寄贈や購入などがありますが、地域の暮らしや文化、産業に関わる資料の多くが寄贈を通じて

収集されます。市民からの寄贈資料は、当館のような地域の歴史博物館にとって館の基礎をなすものです。地域の歴史の中で資料を持つ価値を見出し、地域に暮らす人々や博物館利用者がその価値を共有することが、資料収集活動の課題だといえます。

平成十九年度収蔵品展「はきもの」展

資料の歴史的価値の共有化という課題への取り組みとして、当館では収蔵品展を毎年開催しています。平成十九年度は「はきもの」のみならず、新潟の下駄文化」展と題して、下駄や下駄作りの職人道具を展示しました。

下駄といえは、今はほとんど使われていませんが、昔前まではありふれていた日常生活用品という印象があります。歴史的には下駄の起源は古く、五世紀には使用されていたことがわかっています。しかし、一般に普及したのはそれほど古いことではありません。江戸時代になると、浮世絵など当時の人々の風俗描写に下駄が多く描かれますが、農村部も含め、広く一般に下駄が普及したのは明治中

ろといわれています。

下駄の普及には、原材料や製品の流通、大量生産体制の確立など、商品を大量に生産・販売し得る条件を備えた産地の形成が必要です。新潟はそうした産地の一つで、江戸時代から昭和の初めごろまで、年間百万足を超える下駄を生産していました。

幕末の新潟奉行川村修就が作らせた「あまのてぶり」には、新潟町の人々が下駄履き姿で盆踊りに興じている様子が描かれています。祭礼時とはいえ、多くの民衆が下駄を履くことができたことから、当時の新潟の下駄生産の隆盛ぶりがうかがわれます。

新潟の下駄生産が発展した理由として、後背地に大きな山林があったこと、山林と新潟の間の河川交通を利用して材木を大量に運搬できたことが挙げられます。同時に、日本海交通を通じて製品の販路を確保できたこと、有数の湊町として大きな人口を抱え、生産に要する人手が得られたことも下駄の生産の発展に寄与したと考えられます。下駄の生産は湊町だからこそ発展したといえます。



収蔵品展展示風景

価値の共有と活性化

「はきもの」展を開催してまず驚いたのが、かつて下駄を作っていたという方やそのご家族が数多くご来館くださったことです。下駄の生産に多くの人々が関わっていたことを改めて感じました。

大きな目的を込めた企画なのです。

新収蔵品展

また、収蔵品展とは別に、新収蔵品展という展覧会を毎年開催しています。平成十九年度は、収蔵品展と新収蔵品展を同時開催しました。新収蔵品展は、過去二年間に市民から寄贈いただいた資料を展示する展覧会です。毎年、当館が収集した資料を広く見ていただくことにより、資料収集活動の具体的な内容を公開し、活動への理解をいただくことを目的としています。実際に収集した資料を見ていただく、自分の家にも同じ物があるという声を寄せられることがあります。博物館と来館者が、その物に資料としての価値を見出し共有できれば、博物館に寄贈されなくとも、所蔵者によって大切な価値あるモノとして地域の歴史資料を次世代に継承することができます。

地域の歴史博物館と資料収集

資料を収集し保存するには、人的設備的に相応のコストを要します。自治体にとって、地域の歴史博物館を設置運営するということは、地域の歴史資料を保存することにコストを投入するということを意味しています。

地域の歴史博物館は、地域が主体となつて地域の歴史資料を見出し、共有し、

また、「はきもの」展を観覧いただいた方からは、下駄や下駄に関わる道具の寄贈申込みを多数いただきました。下駄職人の道具は、過去にも寄贈を受けていましたが、新たな寄贈によりコレクションが広がりました。当時の下駄作りに関する情報も何うことができ、「新潟で盛んだった下駄生産」の実像が少しずつわかってきたことも大きな収穫です。当館所蔵の資料にはなかったタイプの下駄を含め、さまざまな種類の下駄も寄贈していただきました。下駄を購入した時や、履いていた時のことなど詳細な話を伺うことができました。

今回、多くの寄贈申込みが寄せられたのは、博物館と来館者間で、「はきもの」展を通じて下駄を地域の歴史資料とし



「あまのてぶり」盆踊りの画(部分)

て捉える視点を共有できたからだと感じています。収蔵品展という場を設けることで、下駄というモノに地域の歴史資料としての価値があることを博物館が来館者に発信でき、さらに展示を見た来館者がその価値を改めて見出し、それによつて、来館者の所有する下駄や道具、あるいは来館者自身の経験を新たな資料や情報として提供していただくことができたのです。新たな資料や情報が加わることで、下駄に関わる資料の歴史的な価値を二層高めていくことができます。

収蔵品展と資料収集

当館の収蔵品展は、新潟の歴史を考える上で興味深いテーマに関して、調査研究がまとまらない段階でも、あえてまとまらない状態のまま、とにかく館蔵資料を観ていただくことを目的としています。資料を精査し、調査研究を蓄積し、しっかりと展示構成をした上で展示を制作するには、どうしても時間を要します。一方で、博物館が収集保存した資料群には、展示を構成するにはまだ及ばないものの、歴史のおもしろさを伝える魅力的な資料が数多くあります。収蔵品展は展示としては簡素で、展示制作も手作りです。しかし、生の素材ながら魅力的な歴史の断片に触れることを通じて、収集した資料群を地域のユニークな歴史を物語る豊かな脈脈として博物館と来館者が共有することを目指す、ちよつと



寄贈していただいた資料(一部)

後世に伝えるための制度・機関です。資料が有する価値を伝えるには、資料の歴史的・文化的価値を活性化させる営みが必要です。博物館と来館者さらには地域に暮らす人々の間で、この営みの絶えざる輪を広げること、はじめて投入したコストに見合うもの、すなわち地域における資料の価値を高め、より多くの人が共有し、活用できるという状況を生み出すことができます。

収蔵品展などの企画を通じて、来館者とともに新潟の歴史を楽しみ、資料の価値を共有し、それを基盤として資料や資料情報を蓄積することが、地域の歴史博物館の使命です。

(もり ゆきひと 学芸員)

酒蔵

近代新潟の酒造り

平成十七年の新潟県の清酒生産量は、

兵庫、京都府に次いで全国第三位です。中でも、純米酒や吟醸酒といった「特定名称酒」と呼ばれる清酒の生産量は全国の二五%を占め、第一位です。また、県内の酒造会社数も、九四軒で全国二位です。生産量だけではありません。新潟県における成人一人当たりの清酒消費量は、八・三リットルで位です。新潟県は「酒造王国」と呼ぶにふさわしい県になりました。

すつきりとした味わいで全国に知られている新潟の清酒は、「淡麗辛口」が代名詞になっています。淡麗辛口の酒は高度経済成長期における欧米風の食生活や労働形態の変化などライフスタイルの変化にマッチし、昭和四十年代以降の地酒ブームを巻き起こした立役者でもありました。では、それ以前の新潟の酒はどのような造られ、人々に楽しまれていたのでしょうか。

今回の展覧会では現在の新潟市域を中心に明治時代から戦時中の酒造りについて紹介します。

酒造りの歩み

現在、新潟市域には一五の酒造会社があります。その多くは、明治時代半ばごろに創業しました。

江戸時代には、酒造は幕府の統制下にあり、酒造株を持つ者のみが酒造を許

されてきました。明治になり、近代的な

租税制度が整備されると、免許税を支払えば誰でも酒造業に参画できる仕組みになりました。酒造には、その道具や原料など多大な資本が必要でしたが、酒造技術がそれほど発達していないころは、酒が腐って商品にできなくなることもあり、リスクの大きな産業でした。しかし、酒造業に参入する人々が増え、造石高が増えると、税収増加のためにも国は醸造試験所を開設し、腐造のない科学的な酒造りを研究し、それを全国の酒造場に普及させていきます。また、県下の酒造場への指導や酒造技能者の育成のために新潟県醸造試験場が昭和五年に設立されます。明治末期から昭和初期にかけては、よりよい品質の酒、よりよい味の酒をつくるために、官民が力を合わせながら努力をしていた時代といえましょう。



新潟の酒

新潟で造られた酒の多くは、地元で消費されました。しかし、新潟と酒を考えると北海道の存在は欠かせません。

近世から北海道(蝦夷地)には、新潟酒も運ばれた品の一つでした。展覧会で紹介している明治四(一八七二)年の「差出申一札之事」では、海難事故などのリスクが伴うけれども利潤も高いため、函館への酒の移出許可を願っています。また、明治十二(一八七九)年発行の「東北諸港報告書」によると、新潟港から北海道諸港へ移出された清酒は五万樽で、移出量全体の三分の二を占めています。清酒だけではなく、焼酎も北海道向けの商品として生産されました。焼酎の原料は清酒生産の副産物である酒粕です。展示資料の「廉平日誌」には、沼垂の酒造業者が西蒲原の酒蔵に酒粕の商談に来たことが詳細に記されています。酒粕は、蒲原平野一円から、信濃川・阿賀野川の水運を通じて沼垂に集積されました。また、焼酎の輸送容器として、旧巻町の松郷屋地区で作られていた松郷屋焼の徳利が使われました。沼垂は原料集積、商品移出に好立地であったため、沼垂へ移転する酒造場もありました。北海道との関係は、酒造という産業にも影響を与えたのです。



藍野 かおり

展覧会の見どころ

この展覧会では、かつて使われた酒造道具をはじめ、酒精計や酒造備忘などを展示し、明治後期から昭和初期にかけて、科学的手法を取り入れた酒造りに変わっていく過程を紹介しています。また、昭和二十年代から五十年代までの現新潟市域の酒造場で作られた酒のラベルも展示しています。さらに、関川村の財団法人重要文化財渡邊家保存会所蔵の約二五〇年前に製造された「宝曆の酒」もお借りして展示することができました。これは、渡邊家が酒造りを行っていた江戸時代から伝わるもので、現存する日本酒では最古のものと考えられています。渡邊家以外での公開は今展覧会が初めてです。この機会に、先人たちがはぐくんだ新潟の酒造りの文化にぜひ触れていただきたいと思っています。

(あいの かおり 学芸員)

常設展示室から

一部リニューアルしました

弥生時代の終わりごろ、ちょうどやまいたいこく、卑弥呼が活躍した時代に、深い空堀を持つ防御性の高い集落が新津丘陵につくられました。その集落は、現在、古津八幡山遺跡として国の史跡に指定されています。当時、倭国と呼ばれた日本は戦乱状態にあり、そのことは中国の歴史書に、「倭国大乱」などの記述で登場します。古津八幡山遺跡は、この地にも戦乱が及んでいたことを物語っています。遺跡からは鉄剣や鏃、石つぶてなどの武器も見つかっています。



古津八幡山遺跡のような戦いに備えた集落は、見晴らしの良い山や丘の上につくられることから、こうした集落を高地性集落とも呼んでいます。この集落が廃絶してしばらくしてから、この地に新潟県最大の古墳・古津八幡山古墳が築かれました。

ところで、新潟市は平成17年に大合併し、平成19年4月からは政令指定都市になりました。合併によって新

潟市域も広がり、遺跡や文化財の数も増えました。また、それに伴って新潟市の歴史も多様な捉え方ができるようになりました。先述した古津八幡山遺跡も合併によって新しい新潟市の遺跡となり、邪馬台国に関連するような歴史ストーリーが新潟市に加わったのです。

みなとびあの常設展示は、合併前の旧市域を対象にしていました。今回のリニューアルでは、まず、この古津八幡山遺跡の解説をあらたに加えました。また、それに続く古墳時代も、角田山麓や新津丘陵の古墳を含めた解説に改めました。その他、新津丘陵で営まれた古代製鉄を伝える製鉄炉の炉壁や、製鉄の操業の際に流れ出てくる鉄滓(不純物)を追加展示し、さらに江戸時代の新潟町の商業を伝える古文書の展示を加えました。

まだ一部のリニューアルに過ぎませんが、確実に新潟市の歴史情報は増えています。今年秋にも展示替えを行う予定です。お楽しみに。

(小林 隆幸 学芸員)



古代製鉄遺跡の炉壁と鉄滓



近世新潟町の商業を伝える古文書

おすすめの1冊

『街の記憶 劇場のあかり』

——新潟県 映画館と観客の歴史——

田村聡昭他編 新潟 新潟市民映画鑑賞会発行 二〇〇七年十一月

本書はサプタイトルに示されているように、映画館とその観客に焦点をあてた書物です。「街で映画を観た」体験を軸として、映画作品の背景に隠れがちな映画館を主役としています。新潟県内に存在する／存在した映画館を可能な限り網羅し、コラムとして映画愛好家たちの映画館体験を挿入する構成をとっているため、資料集としても、読み物としても楽しめます。

本書を読むことで、かつて新潟県内には現在では考えられない数の映画館が存在していたことが分かります。そして、総合芸術である映画が人々の娯楽の中心にあった時代の姿を、掲載された資料や寄稿者の熱い文章から知ることができ

ます。当館との関わりでいえば、本書の製作に際して編集スタッフの方から映画館に関する資料がないかという照会があり、分かる範囲で資料を集めてお答えしたことがあります。調べてみて、思った以上に映画館に関する資料というは少ないという印象を受けました。展示になりづらいテーマを博物館で取り上げることは難しいのですが、本書にまとめられた仕事を参考に、新潟市の文化的な基盤に関する資料を集めていければと思います。



(岩野 邦康 学芸員)

「石山村の学区会」

伊東 祐之

山潟小学校開校二〇年記念の『山潟のあゆみ』の編集には、PTAや同窓会だけでなく、自治連合協議会が加わっています。「あとがき」には「地域を愛し、地域に根をおろした、よりよい教育の推進に役立てば幸甚である。」と記されています。この本には、この地域の人々が学校と深くかかわってきた歴史が反映しているのではないのでしょうか。

◆石山村の誕生と学区

明治三十四(一九〇二)年、石山村、山潟村、木戸村が合併して石山村ができました。旧村の小学校を引き継ぎ、新しい石山村の小学校は三校になりました。明治二十三(一八九〇)年に定められた「地方学事通則」には、町村を小学校教育事務のために学区に分け、学区が小学校を設立・維持することができる規定がありました。

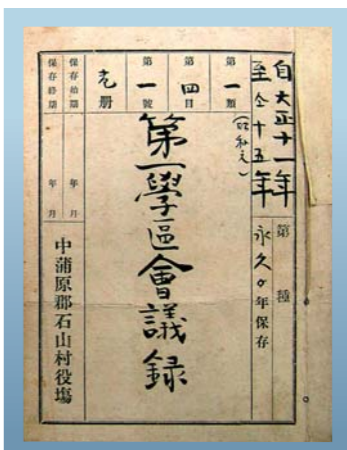
石山村では三校の基本財産をついに、三校いっしょの教育予算を組みました。しかし、村会には全村均一の基準で徴収される村税を他の旧村の学校が使うことに不満があったらしく、村は教育費を旧村単位で徴収するため学区設置を郡に上申しました。郡も円滑な合併のた

めか、旧村単位で教育費の徴収・支出ができる学区設置を郡内で進めました。大形村は明治三十五(一九〇二)年十月に郡から学区指定を受けています。石山村では十一月村会に「学区会条例」が諮問されています。大形村と同時期に学区指定があったのでしょうか。この条例では、村会議員と同様に選挙された各学区二二人の学区議員が学区会を構成することになっています。三十六年一月、各校に基本財産が再分配されています。

◆学区会の役割

石山村の大正十四(一九二五)年度予算の歳入総額は四万五九八円でした。うち三学区の歳入合計は三万三三三三円で歳入総額の七三%を占めています。教育は村行政の中心でした。各学区会は村が作成した学区予算案を審議しました。たとえば第三学区会は、明治四十四(一九二二)年度予算案を審議し、備品費、修繕費、学資金蓄積費などを減らし、歳出額一九一〇円を二六〇七円に削減しました。大正十三年二月の第三学区会では、小学校を増改築するか移転するかを議論し、移転を決めています。各小学校併設の実業補習学校についても学区

会が運営しました。学区会は学校と協力して学区の教育を運営していました。



学区会議録

◆学区廃止の動き

学区制は旧村を単位としたため、教育が行政の中心的部分を占めていながら、町村政一般と別の枠組みで運営しなければならず、町村の事務量は多くなりました。両川村では明治四十二(一九〇九)年に四校を二校に整理し、学区を廃止しました。政府は大正三(一九一四)年に「地方学事通則」を改定し、学区廃止時の財産処分の手続きを規定していました。大正十二(一九二二)年二月、中浦原郡長は「町村事務ノ簡捷」「町村費節約」「教育ノ効率ヲ増進」「自治団体ノ統一」を理由に、町村に学区廃止を諮問しました。大正十二年に学区を廃止し

た大形村は、この郡の意向に沿ったのでしよう。石山村は回答を保留しました。実は前年二月に石山村長は学区会に独自に学区廃止を諮問していました。村長は「国家ノ責務」である教育が学区に委ねられているのは「旧部落的観念」「時代錯誤」であると糾弾しました。学区会は結論を「保留」し、学区を廃止しませんでした。学区議員は、学区の学校が村の学校として一括して運営されることに賛成できなかつたのでしよう。以後も学区会は高等科設置、実業補習学校充実、校舎増築などを議決し、学区の教育に携わっていました。

次第に全体主義的な風潮が強まり、均一な軍国主義教育が求められるようになります。昭和十五(一九四〇)年五月、第二学区会は学区廃止に同意します。六月三十日、県が学区廃止を許可し、学区財産は村に引き継がれ、石山村の学区制は終わりました。しかし、四〇年間近く続いた学区制は、学校は地域のもの、地域をよくするために学校が大切、という伝統をこの地域に根付かせたのではないのでしょうか。

(い)とう すけゆき 学芸課長

健粕甘

新潟市歴史博物館 館長

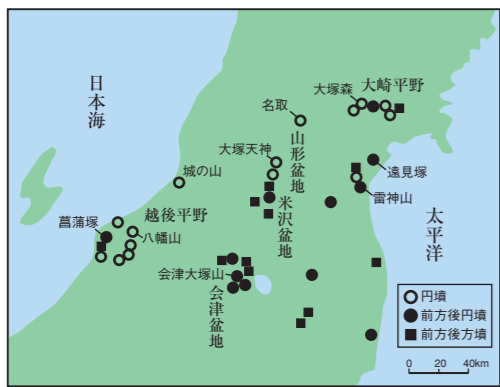
北限の大型円墳

西蒲区竹野町(旧巻町)の葛塚古墳は北限の前方後円墳として有名で戦前から国の史跡にも指定されています。一九八〇年以降、前期古墳が次々に発見され、北限の古墳も胎内市(旧中条町)城の山古墳まで北上することになりました。意外なことに葛塚古墳以北で新たに発見された古墳はいずれも円墳でした。その中で、秋葉区古津八幡山古墳は径五六メートルの大円墳で、長さ五三メートルの葛塚古墳を超える越後最大の古墳です。一方一九八九年に学術調査が行われた三条市保内三王山二号墳は径二メートルの小規模な円墳ですが、鏡・玉類・鉄剣・鉄斧等豊かな副葬品が出土し、円墳の被葬者の権勢がうかがえました。

去る二月にみなとぴあで開催された関東・東北前方後円墳研究会は前・中期の大型円墳の実態と性格を広く検討した初めてのシンポジウムでした。そこで明かになったのは、古墳の北方への伝播の三つのルート(日本海沿岸・奥羽山地の盆地列・太平洋沿岸)のそれぞれの北端に径三〇〜五〇メートル前後の大型円墳が集中している事実でした。その南には前方後円墳、前

方後円墳が分布しています。一体三つの墳形の違いは何を意味するのでしょうか。結論的に言えば、前方後円墳はヤマト政権の中核をなす大和の王と王族、およびそれ等と同族と見られる全国の首長の、前方後円墳は東海西部・北陸に出自を有しヤマト系の首長と異なる系譜で結ばれた首長グループの、大型円墳は王権に臣従し、王や王族の直属民を管掌する原初的な官僚の性格を持った首長のそれぞれの身分の表示と考えられます。ヤマト政権は北方進出ルートの最前線に、王権に忠実な円墳系首長を配置したのでしよう。

(あまかす けん 館長)



収蔵資料紹介

直江兼統と沼垂湊 ―上杉景勝朱印状― (沼垂町役所文書)



今度沼垂の地に於いて、忠信を抽んで比類無きの旨、御感じ候、茲に因り、船隻艘、海・河共諸役を免じ、相違有るべからざるものなり、仍つて件の如し
直江兼統之
天正十四年
(朱印影写)
十月朔日
嶋垣隼人佐とのへ

今回の沼垂攻略における嶋垣の忠義の活躍は、他に比べるものがなく、景勝様は感激している。よつて戦功の賞として、嶋垣の船一艘について海河の通行税を免除する。以上、直江兼統が景勝様の意を奉じて嶋垣隼人佐に通達する。

今回は戦国時代の沼垂湊に関する、直江兼統の古文書を紹介します。直江兼統は上杉景勝の執政として、越後の国政を掌握していました。この免許状は景勝の意を受けて、家臣への褒賞を行った朱印状の写しです。

天正九(一五八二)年から

続いていた上杉景勝と新発田重家の戦いは、同四年に大きく形勢が変わります。

信濃川・阿賀野川の河口に位置する新潟・沼垂の湊は、越後の軍事・流通の要でした。重家は川中の白山島に城を築き、新潟町から人質を取つていまし

新発田重家の乱の平定によつて、新潟・沼垂湊は、景勝・兼統の支配下に置かれました。新潟・沼垂湊は、景勝・兼統の越後統一、佐渡・出羽への進出拠点として、重要な役割を担ったものといえましよう。

(長谷川 伸 学芸員)